

地宗寺遺跡発掘調査報告

—国道261号線 道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1982

広島県教育委員会
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

I はじめに	(1)
II 地宗寺遺跡の調査	(3)
1. 調査の概要	(3)
2. 遺構と遺物	(5)
(1) 旧石器時代	(5)
(2) 弥生時代	(22)
3. まとめ	(25)
III 河原山2号遺跡の調査	(26)

例 言

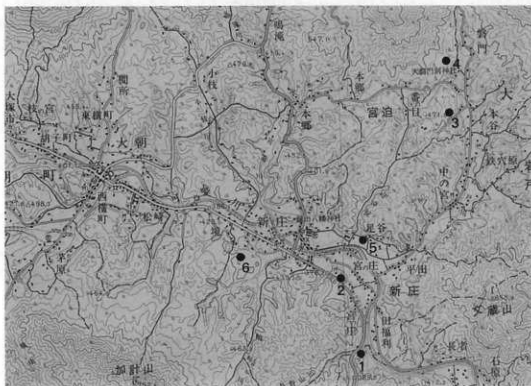
1. 本報告書は道路改良事業（一般国道261号線，八重バイパス建設）に伴い，昭和54年4月に実施した河原山2号遺跡と昭和56年10月から同11月にかけて実施した地宗寺遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は，広島県教育委員会から委託を受け，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書の執筆は，I・IIを三枝健二が，IIIを飯沼益生・三枝が分担して執筆し，三枝が編集した。
4. 出土遺物の整理，実測整図は三枝・青山透があたり，出土遺物の写真は青山が撮影した。
5. 地宗寺遺跡の土壌分析は，広島大学理学部地質学教室柴田喜太郎氏によるものである。
また，本報告作成にあたり，次の諸氏の御教示を賜った，記して謝意を表したい。
田中英司，戸田正勝，萩原博文，平井三恵，松藤和人
6. 本報告中の出土遺物の縮尺については，石器は $\times 1/2$ ，土器は $\times 1/3$ に統一した。
7. 本書に掲載した第1図は，国土地理院発行の50,000分の1の地形図を使用したものである。

I. はじめに

地宗寺・河原山2号両遺跡の調査は、一般国道261号線改良工事によるものである。

両遺跡については、昭和49年5月、広島県加計土木事務所長から県教育委員会教育長宛に、道路改良事業地内に於ける埋蔵文化財の有無についての照会があり、県教育委員会では分布調査(昭和51年10月)を行い、地宗寺遺跡・河原山2号遺跡の両遺跡を確認した。昭和53年9月、加計土木事務所長から県教育長宛に、53・54年度(道路)改良工事予定地区の発掘調査の依頼があり、昭和54年度以降調査の予定になった。昭和54年4月、文化庁長官宛に、河原山2号遺跡の発掘届を提出、同4月20日から27日まで延べ6日間にわたり河原山2号遺跡の調査を実施した。調査面積は約140㎡である。次いで、昭和56年9月、文化庁長官宛に、地宗寺遺跡の発掘届を提出、同10月5日から11月21日まで延べ29日間にわたり地宗寺遺跡の調査を実施した。調査面積は約310㎡である。

なお、調査にあたっては、大朝町教育委員会、千代田町教育委員会、加計土木事務所および大朝町文化財保護委員久枝秀夫氏、新庄高等学校教諭小田正明氏から多大な御協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。

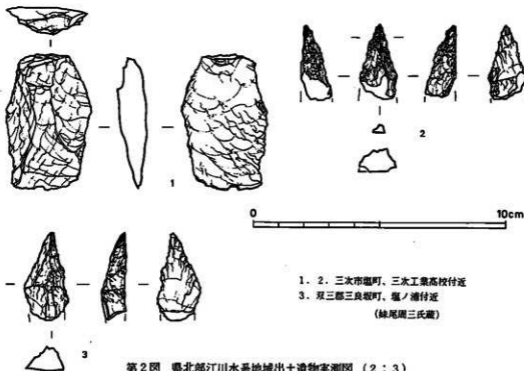


第1図 位置図(1:50,000)

1. 河原山2号遺跡(縄文早-古墳)
2. 地宗寺遺跡(旧石器-弥生)
3. 洞泉寺遺跡
4. 天物門別神社遺跡(縄文-弥生)
5. 横路遺跡(弥生-古墳)
6. 関の段遺跡(縄文早)

大朝町の遺跡は、縄文早期から後期まで断続的に分布し、昭和56年に調査された横路遺跡により弥生時代前期から古墳時代までの様相が明らかとなった。特に縄文早期遺跡の分布、立地は今回の地宗寺遺跡と同様な、河川流域の低丘陵付近に立地する例が多い。県下では当遺跡を含め、現在10数例の旧石器時代遺跡が知られている。これを地域別にみると、瀬戸内海沿岸では、東部に宮脇遺跡、亀山遺跡が、更に三原市で宿禰島遺跡が、次いで広島市周辺域では、現在のところ東広島市西条町平木池遺跡で尖頭器の出土が知られている程度で、同地域における縄文草創期から早期にかけての遺跡分布に対し、その報告例はすくない。これに対し、県北部では東部の帝釈峽遺跡群の他に、西部に冠遺跡、聖湖々畔梅床遺跡などが、中央部では三次市下本谷遺跡、下山遺跡、松ヶ迫遺跡と三次工業高校、双三郡三良坂町堰ノ浦などがあげられる。

第2図は、三次市三次工業高校、三良坂町堰ノ浦採集の遺物である。1の縦長状刮片は両辺および下辺に部分的に微小な剝離痕がみられる。黒色の流紋岩系石材使用。2は舟底形石器で下半を欠く、甲板面はポジティブな面で、両側縁の調整剝離は比較的内念、稜上調整はやや粗い。3は縦長状刮片素材のナイフ形石器、背部の調整剝離は比較の粗いタッチで、端部では2同様細かな調整を行う。素材刮片に左右され、刃部は切出し状を呈す。基部バルブ付近を欠損する。2・3ともに安山岩系石材を使用している。以上3点は、ともに造成後の表探であるが、従来、高田流紋岩類の石材を多用し、瀬戸内地域とは様相を異にしていた地域にあって、今後、地宗寺遺跡を含め、県北部江の川水系流域での貴重な資料といえる。

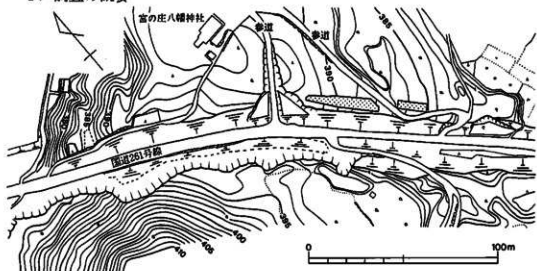


1. 2. 三次市堰町、三次工業高校付近
3. 双三郡三良坂町、堰ノ浦付近
(録尾周三氏蔵)

第2図 県北部江川水系地域出土遺物実測図(2:3)

II. 地宗寺遺跡の調査

1. 調査の概要

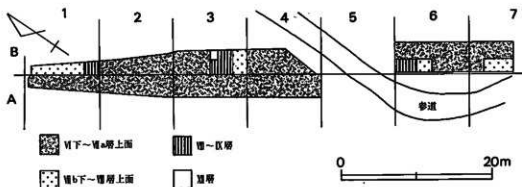


第3図 地宗寺遺跡調査区周辺地形図（1：2000）（アミ目は調査区）

地宗寺遺跡は、山県郡大朝町大字新庄字宮の庄にある。舌状に延びる当丘陵は、その基部を明治年間に道路（現国道261号線）建設のため分断され、その後丘陵側及び山側で縄文早期から弥生中・後期、古墳時代にかけての遺物が採集され、ともに地宗寺遺跡A地点及びB地点と呼称されている。調査地域は先のA地点の一部で、丘陵側の富の庄八幡神社への2本の参道に挟まれた部分の国道沿いにあたり、道路掘削時の崖面の著しい崩壊ならびに調査区内を斜行する参道の存在などによって、調査区は限定された。

調査区の設定にあたっては、拡幅予定地の中央に拡幅ラインとほぼ平行に軸線を設け、これに対して道路側をAライン・丘陵側をBラインとし、更にその軸線を北側起点から10mごとに区切り、北から順次1・2・3……と7区画し区を設定、各々、A1から7、B1から7区とした。当初、弥生時代の遺構等の存在が想定され、AB1から4区（以下北調査区と略）の各区ごとに幅40cmのセクションベルトを残し掘下げを開始、次いで遺跡の範囲確認のため参道を挟んだB6・7区の土捨て場予定地に2×16mのトレンチ（以下1Tと略）を設定し調査を進めた。

その結果、表土下の黒色土層は自然擾乱、流出が進み、遺構はB1区で遺存状況の悪い住居跡1軒を確認したのみで、他の弥生土器等も黒色土層下部（擾乱面）で散発的に出土したに止った。また、崖面観察で地表下約2～3mの礫層までに数枚の黄褐色系粘質土層を確認していたため、旧石器時代遺物の有無の確認のため1Tを掘下げ、黄褐色土層中から石器、剥片を検出、その分布範囲を把握のため、更に1Tを幅2m拡張し、北区全域も同一層準で、当該期の遺物を面として検出した。その後B1区、B3区、B6区に深掘り区を設け、礫層までの堆積状態の把握を行った。



第4図 地宗寺遺跡調査区設定図及び掘下げ表示図 (1:500)

層序

崖面観察・各区深掘り調査によって、当丘陵(段丘)の形成過程を示す堆積状況と旧石器時代および弥生時代の2枚の文化層を検出。旧石器時代文化層の直上に、良好な堆積状態の火山性堆積物を確認した。

第Ⅰ層—表土。

第Ⅱ層—客土=明治年間の道路掘削時の排土である。

第Ⅲ層—黒色土層=平均約40cm程の厚さで、上部は自然攪乱をうけ、下半は比較的しまりが良く、弥生土器片等は下部上面で出土した。

第Ⅳ層—漸移層=上半(a)と下半(b)に分けられる。上半は黒色土の浸潤によって、暗茶褐色を、また下半は茶褐色を呈す。粘性をもち、しまりは悪い。Ⅲ層とは不整合面を成す。

第Ⅴ層—黄褐色粘質土層=上半(a)と下半(b)に分かれる。上半はⅣ層下部と不整合面を成し、若干粘性をもつが、しまり悪くボソボソとする。下半は粘性も強く硬くしまっており、山石等を全く含まない。a層とb層は不整合な状態で、a層がb層のソリフラクション^{*}等による風化土壤である事が窺われる。また、b層最下面と次のⅥ層上面とは、きれいな整合面を成し、崖面観察では当丘陵のほぼ全域に見られる。土壌分析の結果、火山ガラス等を含み給良Tn火山灰に比定される。

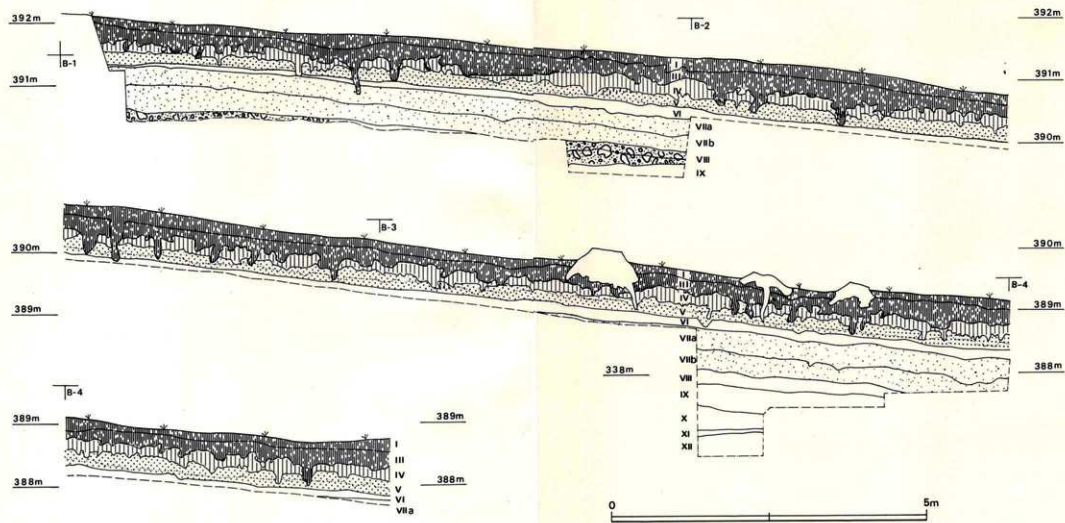
第Ⅵ層—淡黄灰褐色土層=旧石器時代包含層。粘性をもち、良くしまっている。生活面はこの層の下部にあたる。遺物のほか、カーボン粒若干と自然小礫等が出土。丘陵上方のB1区では薄く、B2区付近から1Tまで約20cm程の厚さをみせる。

第Ⅶa-b層=この層から下は無遺物層。調査時にはⅦaを3層に、Ⅶbを2層に、それぞれ分層した。ab両層とも淡黄褐色から淡赤褐色を呈する硬質粘性土で、粗砂質である。

第ⅧⅠ区層=礫層及びそれに相当する(B3区)土層。B1区とB6区の礫層の比高差が約5mあり、同一層準の礫層かどうかは疑わしい。

第ⅧⅡ区層=明乳黄褐色の砂質粘土と粘質土層の互層。

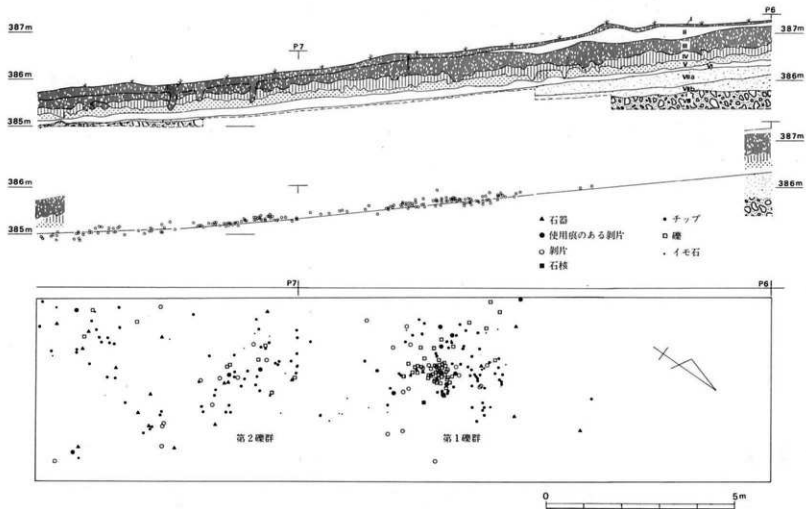
*ソリフラクション——褶立ち現象



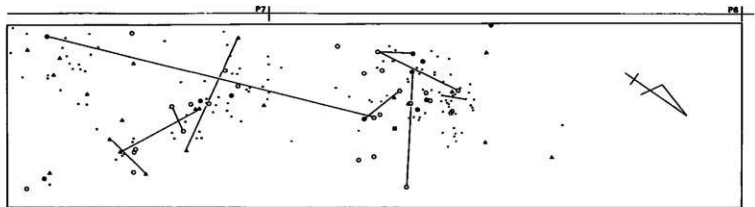
- 第I層表土層
- 第II層—客土層
- 第III層—黑色土層
- 第IV層—漸移層
- 第V層—黃褐色粘質土層(大山区)
- 第VI層—淡黃灰褐色土層
- 第VII層—淡桃赤褐色硬粘質土層
 - a-1層—淡桃赤褐色硬粘質土層
 - a-2層—淡黃褐色硬粘質土層
 - a-3層—淡乳黃灰色硬粘質土層

- 第VIII層-1層—淡赤褐色硬粘質土層
- b-2層—淡黃褐色硬粘質土層
- 第IX層—IX層及びそれに対応する土層
- 第X層—明乳黄褐色砂質粘土層
- 第XI層—明乳黄褐色粘土層
- 第XII層—明乳黄褐色砂質粘土層

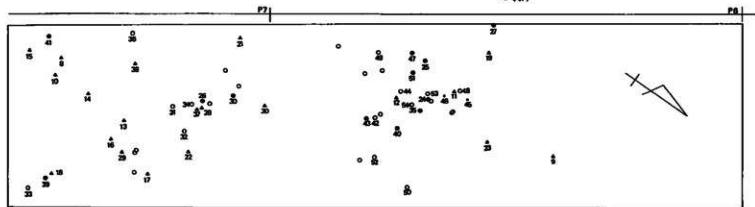
第5圖 地蔵寺遺跡北調査区東壁土層断面図(1:60)



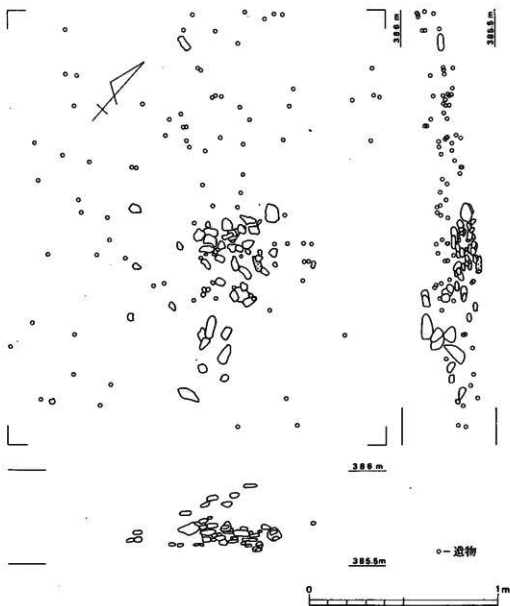
第7図 地宗寺遺跡 1T. 土層断面図及びユニット1平面及び垂直分布図 (1:80)



- ▲ 石器
- 使用痕のある剥片
- 剥片
- 石核
- チップ



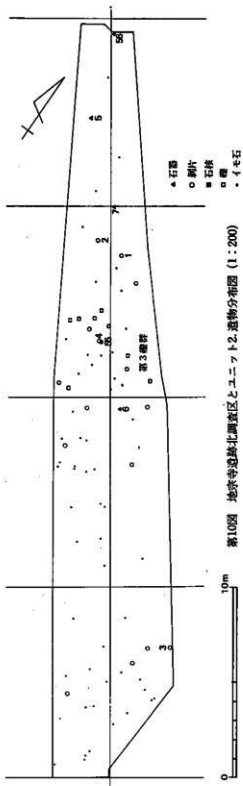
第8図 地蔵寺遺跡1T. ユニット1の石器類分布図及び接合図(1:80)



第9図 地蔵寺遺跡ユニット1.第1礫群実測図(1:20)(アミ目はハンマーストーン)

ユニット1

1TのB6区南半からB7区にかけて広がり、参道及び調査区外に挟まれるため面的な広がりについては言及し難いが、B6区北半は黒曜石製のラウンドスクレイパーを境にしてイモ石等も分布せず、明瞭に分布範囲を示す。遺物はラウンドスクレイパー(No.9)、切出し型ナイフ形石器(No.8)の他は、すべて安山岩製で第1礫群と第2礫群は、母岩分類からも比較的是っきりと分かれる。その石器組成は、第1礫群側で黒曜石製ラウンドスクレイパー、楔形石器³⁾のほか錐・サイドスクレイパー・ハンマーストーンなどがあり、石核・使用痕のある剥片・剥片類の他にチップも

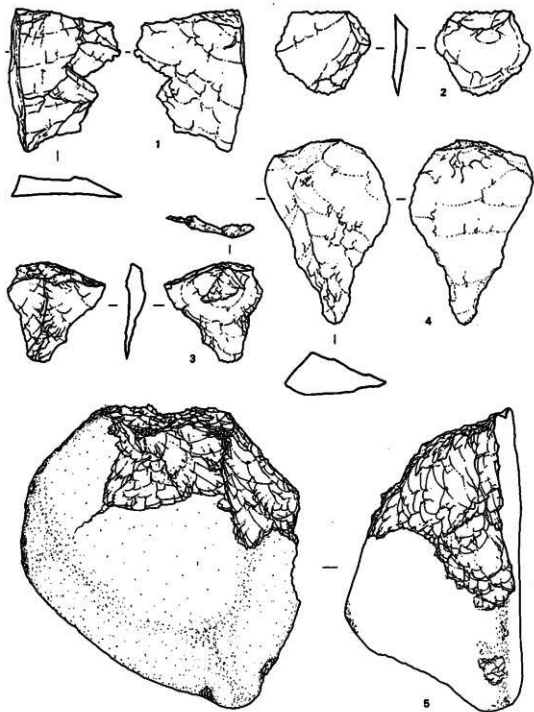


第10図 東京寺遺跡北調査区とユニット2遺物分布図 (1:200)

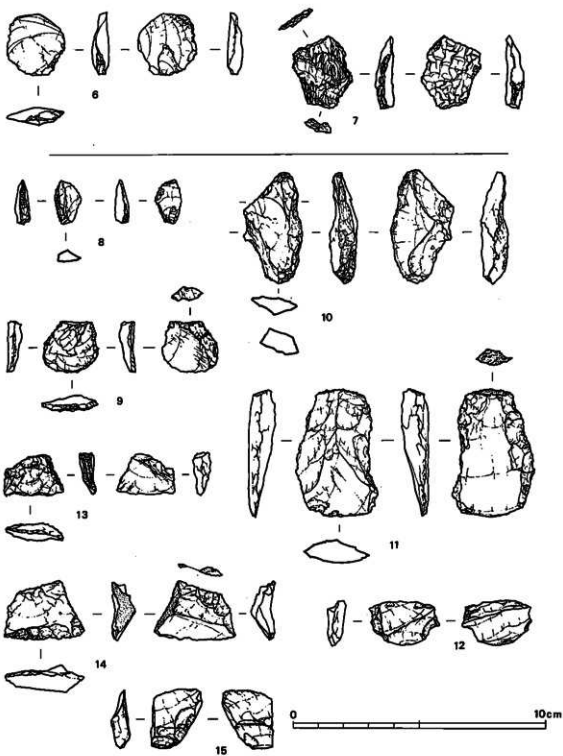
ほぼ同様な分布を示す。また、ハンマーストーンは第1礫群の最下部からNo35の剥片と接して出土した。ついで、第2礫群を中心としたB7区では、残核の転用と思われるスクレイパーを含み、長さ1.6cmで入念な調整剝離を施した小形の切出し形ナイフ形石器と切出し状の刃部様の辺をもつサイドスクレイパーを含む各種スクレイパー、楔形石器と、使用痕のある剥片などを含む。接合関係では、両礫群間では一例のみ (No41+42) で、他の8例は、おのおのの分布範囲内で接合する。特に第1礫群を中心にNo47+48+49, No50+51, No43+44の接合例と同一母岩のもの (No24, 11, 12, 40) が相接しており、B7区のNo13, No22+23も同一の母岩と思われる。平面的にはユニットの中で礫群を中心とし、分布密度によって、2つのグループに分けられるものの、母岩分類、接合関係などから相互に重複し合っている。

ユニット2

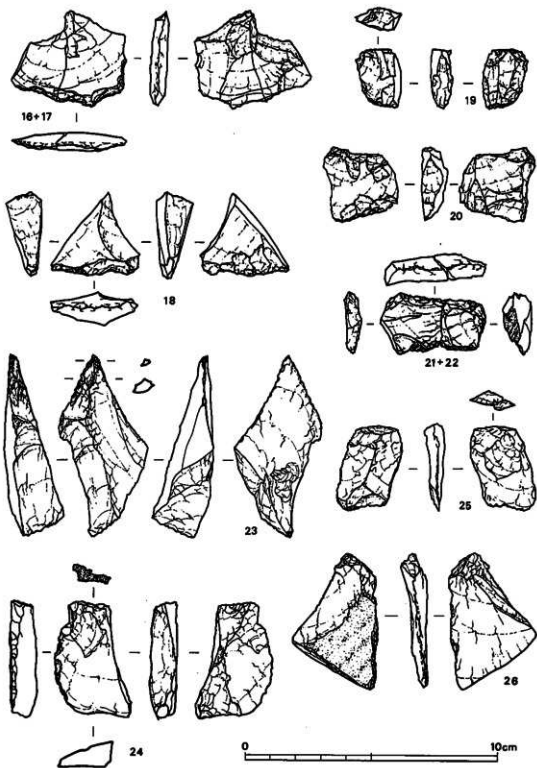
A1, B1区からA4, B4に広がる。調査区ほぼ中央の、第3礫群から調査区北端までにナイフ形石器2点、チョッパー、台石各1点が出土。当ユニットでは、使用石材がユニット1と比べ、先のB4区の剥片以外全く異り、粗質の風化した安山岩と流紋岩系 (2種類)、石英・水晶・不明石材となり、ナイフ形石器は水晶と不明石材各1点で、大半は石英と、流紋岩系の風化の著しい石材に分れる。調査区上部のA1・B1区では遺物分布は希薄で同一母岩の石核 (No55) と剥片 (No.4 など) が第3礫群と同一域に分布する。チップ等の出土はなく、石材、石器組成、分布状況などユニット1と際立った違いをみせる。未調査区にかけて複数のユニットの広がりが見られる。



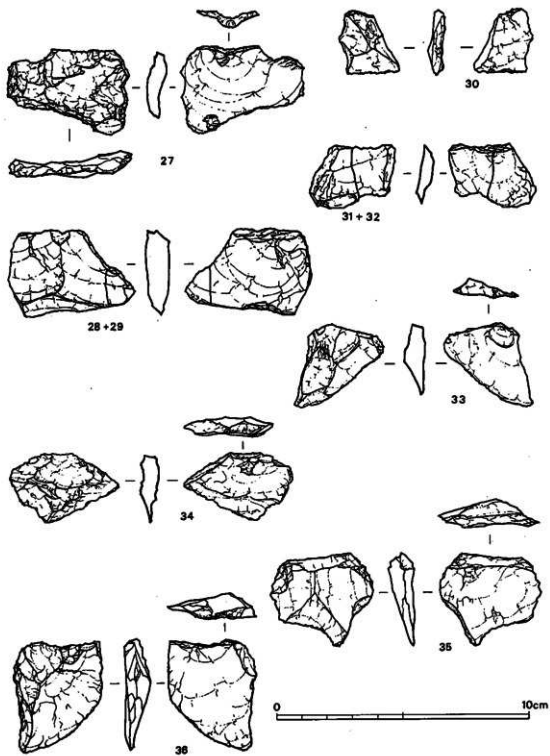
第11図 ユニット2石器実測図(剥片及びビョッパー)(2:3)



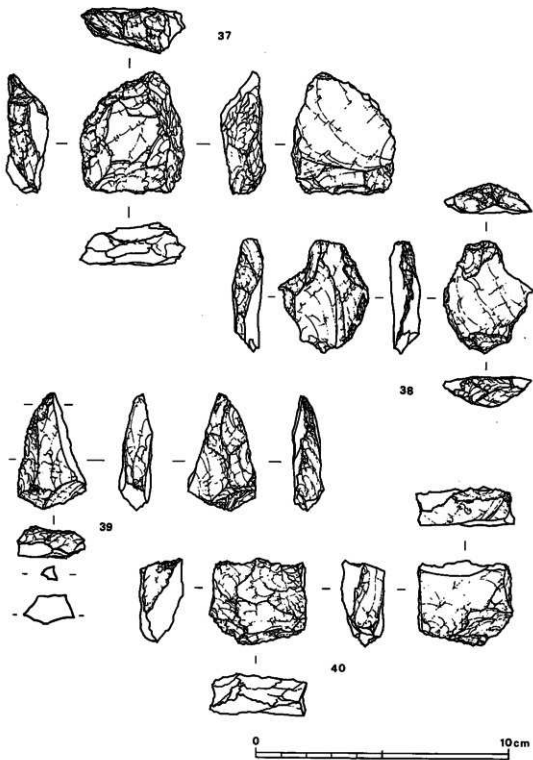
第12図 ユニット1及び2石器実測図(ナイフ形石器, スクレイパー類) (2:3)



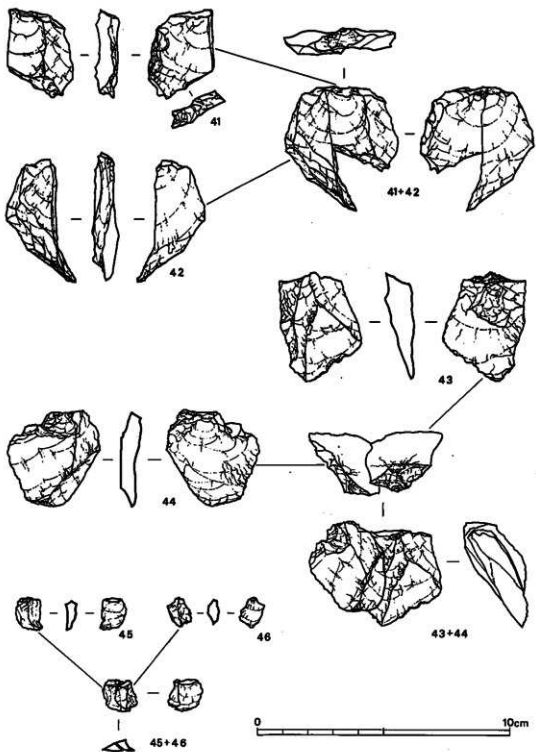
第13図 ユニット1石器実測図 (スクレイパー、ピエスエスキュー及び使用痕のある剥片類) (2:3)



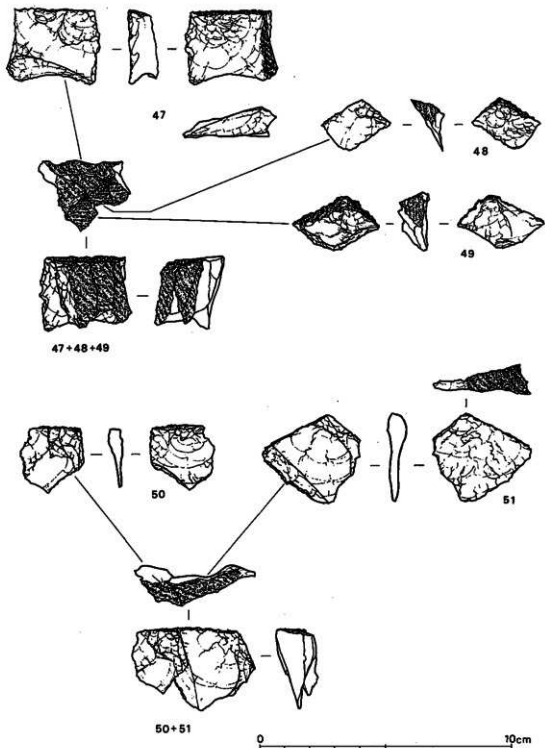
第14図 ユニット1石器実測図（使用痕のある剥片及び剥片類）（2：3）



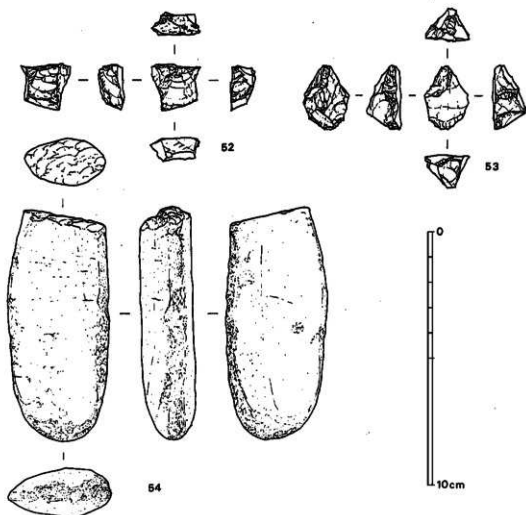
第15図 ユニット1石器実測図(スクレイパー, 石核) (2:3)



第16図 ユニット1石器実測図(接合遺物)(2:3)



第17図 ユニット1石器実測図(接合遺物)(2:3)



第18図 ユニット1石器実測図（不明削片類及びハンマーストーン）（2：3）

ユニットの性格と石器組成

調査区のⅥ層からは、2つのユニットと、それに伴って3つの礫群を検出した。これらの礫群は、礫の個体数・分布状況などで異なるが、各ユニットの形成と大きく係わりをもつものと思われる。面的な把握に制限があるがユニット1は98%が安山岩で占められ、B7区に比べ遺物集中度の高いB6区では、接合遺物との同一母岩品が多く集中、ハンマーストーン・チップの接合例なども含み、同空間が石器製作と深く係わることを示し、B7区側に、その生活空間の拡大が窺われる。またこれと出土層準を同一にするユニット2のあり方も、単に石材の差異のみに止まらず、生活・居住城内での行動様式を反映するものであろう。組成はきわめて貧弱であるが、ユニット1にはみられない石器を含み、チップ類を含まないなど、旧石器時代の遺跡における遺物密度の希薄な空間のあり方を考えるうえでも好例といえる。

両ユニットの組成内容は第1表に示す通りで、これに礫群などの礫88点、イモ石83点を加え、総計388点を数える。このうち石器は26点で、極めて小形の切出し形のナイフ形石器を特徴とする小形ナイフ形石器3点、ラウンドスクレイパー、サイドスクレイパー、台形縁スクレイパーなどの各種スクレイパー類15点、楔形石器4点、錐1点、チョッパー1点、ハンマーストーン1点、台石1点などと、比較的变化をみせており、中には彫器の可能性のあるもの(No.41)もみられる。

ナイフ形石器はいずれも安山岩以外の石材が用いられている。全体的にナイフ形石器、スクレイパーなど、打面及びポジティブバルブを残置する傾向が強い。

剥片剥離技法のあり方については多くの問題が残され、他との対比を含め再検討が要されようが、一応これに関連して、加撃方向と剥離角度について概略する。ユニット1の接合資料のほかに、剥片背面にポジティブな面とそのバルブ付近を止める例(No.8, 36, 39)などがある。接合資料も含めると、母岩分割による剥片素材の石核を多用。自然面(剥離面)平坦部及びその稜部を加撃、更に剥離作業の進行に伴い、打面調整もなされている。背面にポジティブバルブ付近を残すものでは、剥片の主要剥離面がこれに直行もしくは斜行する。全体に剥離された剥片は縦長状のもの、長幅比約1:1のものが混在し、剥片剥離の進行過程で打面の転移が窺われる。

また、剥離角度はその計測可能なもの31点を80°から150°まで10°単位で例数を数量化した。それによると80°, 90°, 140°, 150°台おのおの1点、100°台7点(22.6%)、110°台8点(25.8%)、120°台6点(19.4%)、130°台6点(19.4%)と資料数は少ないが100°~130°台に集まる傾向を示す。

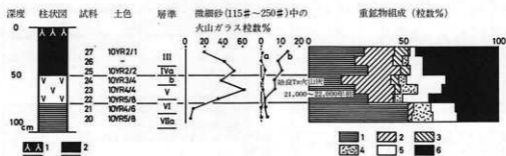
第1表 地宗寺遺跡第Ⅶ層出土石器類一覧表

器種	石材	ユニット 1						北調査区(ユニット 2)						総計	
		安山岩	流紋岩	水晶	石英	黒曜石	その他	小計	安山岩	流紋岩	水晶	石英	花崗岩系		その他
ナイフ形石器						1	1			1			1	2	3
スクレイパー類		14			1		15								15
楔形石器		4					4								4
錐		1					1								1
チョッパー									1					1	1
ハンマーストーン						1	1								1
台石											1		1	1	1
使用痕のある剥片		8					8								8
剥片		24					24	3	4	3	7			17	41
石核		1					1		1					1	2
チップ		137					137								137
その他		3					3								3
計		192			1	2	195	3	6	4	7	1	1	22	217

- 1) 礫・石器・剥片などの集中部分で、生活面に形成される。小田勝夫他「武野公園遺跡Ⅰ」, 昭和48年ほか。
- 2) スクレイパーの刃部加工に類似するが、調整と異り使用による潰れ痕のものと、微小剥離痕を止める2種がみられる。
- 3) 潰れ痕、縦断面をもち、楔としての機能が考えられている。縦断面のある石器とも呼ばれる。(同志社大学旧石器部研究会「ふたがみ」昭和49年)
- 4) 小林建雄「アメリカ考古学における〈セトルメント・アーケオロジー〉成立の背景」
C.T.キリー「セトルメント・アーケオロジー」『信濃』23-2, 昭和45年, その他。

火山灰について

当遺跡の北調査区のB3区深掘り坑の土壌分析を行った結果、漸移層下半の第IVb層下面から、旧石器遺物包含層の第VII層上面にかけて、(サンプル番号22から24)、火山ガラス含有量のピークを確認、分析者柴田氏はこれを次の理由によって、21,000年から22,000年前に鹿児島県南部の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰に対比した。同氏によると、対比の根拠とするところは、①試料中に含まれている火山ガラスの形態構成が、従来始良Tn火山灰とされてきたものに含まれている火山ガラスに酷似し、時代的に新期になるアカホヤ火山灰に見られる火山ガラスとは明確に異なること、②始良Tn火山灰とアカホヤ火山灰は共に重鉱物を少量しか含まない為はこの点では区別できないが、重鉱物組成の中で、始良Tn火山灰がアカホヤ火山灰には見られない角閃石を含んでいることが知られており、第19図に示したように分析に供した試料中にも見られる。一部では火山ガラスが附着する角閃石が含まれていることにより始良Tn火山灰と考えられる。とのことで、V層が上半でソリフラクションによりソフト化しているものの、下半は緻密硬質で、VII層とはその境で整合面を成しており火山灰降下時の一時性を示している。



凡例 柱状図 1. 樹根 2. 黒色有機質シルト("黒ボク")

3. ガラス質火山灰 4. その他

重鉱物組成 1. 角閃石 2. 斜方輝石 3. 単斜輝石 4. 雲母類

5. その他 6. 鉄鉱物

a. 微細砂に含まれる重鉱物重量%, b. 火山ガラスが附着する重鉱物の粒数%

第19図 地宗寺遺跡B3区深掘り区の堆積物分析結果(分析、柴田喜太郎1982)

第2表 地蔵寺遺跡第Ⅴ層出土遺物観察表

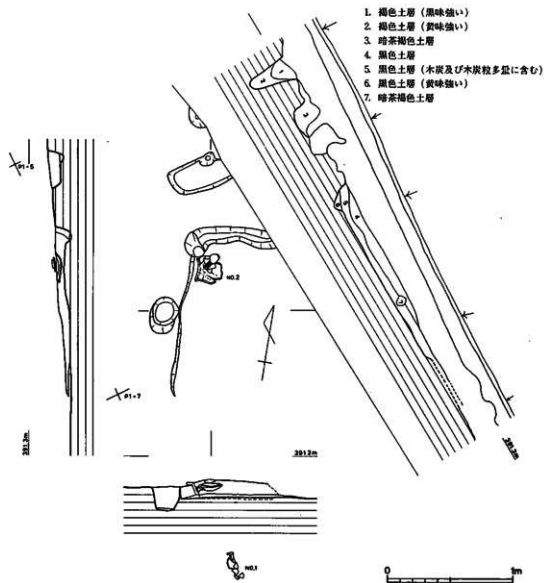
遺物No. (随伴)	器 種	石 材	法 量 (mg)				割離 角度	接合 関係	備 考	整理遺 物 No.
			長さ	幅	厚さ	重さ				
1	刷	片	5.8	4.2	1.0	22.1	155°		加筆時に平欠、風化。石の目は割離方向に対し逆目。	411
2	刷	片	3.3	3.6	0.5	6.4	139°		No.1と同一母岩。同様に風化。石の目は順目。	423
3	刷	片	4.0	3.3	0.6	7.0	131°		接部付途を加筆。パンナ痕止める。	478
4	刷	片	7.6	5.0	1.7	47.0	120°		風化著しく詳細不明。縦長状を呈す。	434
5	チョッパー	流紋岩	12.0	10.5	7.0	99.1			片端一辺に平坦面側から刃部調整。刃部角度は100°~110°程。自然面破面には融打痕。	404
6	ナイフ形石器	不明 頁岩か	2.4	2.4	0.7	2.6	81°		長幅比約1:1の割片。基部寄り側辺の一部に細かなブランディング。対向する辺を中心に微小割離痕。打面ポジティブバルブ残す。背面は割面に對しほぼ直交なネガティブな面。	461
7	ナイフ形石器	水晶	2.9	2.0	0.8	3.8	104°		基部寄り両側辺にやや角度のついたブランディング。上半部は折損。上半一部に水晶原石面。打面及びポジティブバルブを残す。	409
8	ナイフ形石器	不明 チャートか	1.7	1.0	0.55	0.5	108°		一側辺に入念で細かなブランディング。対向する一辺の基部寄りにもブランディング。刃部は直線的で切出し状を呈す。先端部欠。刃部に使用痕。打面ポジティブバルブ残す。背面には約90°傾いた方向のポジティブな面のバルブ近くをのこす。	141
9	ラウンド スクレイパー	黒曜石	2.0	2.2	0.5	2.0	117°		背面に大きく割離面。その一部に割面から調整。転じて背面側から基部を残して微細な調整割離。先端部一部を折損。打面ポジティブバルブ残す。打面にパンナ痕。石質はやや粗い。	1
10	サイド スクレイパー	安山岩	4.5	2.3	1.0	8.3			横長状割片を素材としポジティブバルブ付途を除去。長さに入念な調整。打面残す。また刃部と打面とによって切出し状になる一辺に使用痕あり。	144
11	サイド スクレイパー	安山岩	5.0	2.9	1.0	13.1	109°		縦長状の割片を素材とする。両側辺に主に背面よりの調整。側辺。下辺に使用痕。打面ポジティブバルブ残す。	198
12	サイド スクレイパー	安山岩		2.8	0.7	2.8			No.11同様なスクレイパーの先端部。両辺に調整。端部で微細割離。	171
13	台形種 スクレイパー	安山岩	1.6	2.2	0.6	1.9			台形種を呈し。打面ポジティブバルブ残す。一側辺に自然面下辺に細かな調整。	129
14	台形種 スクレイパー	安山岩	2.3	3.3	0.7	4.1	134°		台形種を呈し。打面ポジティブバルブ残す。一側辺に自然面下辺に調整により刃部を作出。	131
15	スクレイパー	安山岩	2.2	2.0	0.7	2.5			台形種なスクレイパーの平欠品。二辺の入念な調整により。直線的な刃部種の辺を造り出す。	138
16	スクレイパー	安山岩	4.5	3.4	0.7	3.1		+17	平欠品。横長状の割片を素材とする。	127
17	スクレイパー	安山岩				7.1		+16		
18	スクレイパー	安山岩	3.4	3.4	0.4 ~1.4	8.6			表面はフラット。2側辺は、横からのネガティブな。またその面から傾いてポジティブな面を、他の一辺に調整を加える。スクレイパー欠品かとも思われるが、側辺の微細面にも使用痕あり。	300
19	横形石器	安山岩	1.7	2.3	0.9	3.3			横長状割片を素材。一辺に打面残す。打面方向からの微細面に微小割離痕。	12
20	横形石器	安山岩	2.7	2.7	0.9	8.7			横長状割片を素材。一辺に打面。両辺に微細面。一部自然面あり。	90
21	横形石器	安山岩				5.3		+22	縦長状割片を素材とし、一端に自然面の打面残す。中央部で	106
22	横形石器	安山岩	4.1	2.4	1.0	3.6		+21	平欠No.21は他の一辺に折れ面をNo.22は鼻折後も使用。	119
23	魚	安山岩	7.2	3.0	0.2 ~3.0	24.5			縦長状割片を素材。先端部に細面調整。背面には同一打面の割離面と、直行するネガティブな面。断面三角。	3
24	U.F	安山岩	4.6	2.5	1.0	12.5	115°		11と同一母岩。割離後。背面中央から平削。対向する側に使用痕。打面は自然面でポジティブ残す。	30
25	U.F	安山岩	3.3	2.2	0.7	5.3	125°		縦長状割片で、打面以外の三辺に微小割離痕。打面にパンナ痕。	23
26	U.F	安山岩	5.5	3.4	0.8	10.6			加筆時に平削。下辺折損。長辺に潰れ状使用痕。	110
27	U.F (スクレイパー)	安山岩	2.9	4.8	0.6	9.8	127°		横長状割片。平坦な割離面を打面とし、パンナ痕あり。下辺。両側辺に潰れ痕集中。	208
28	U.F	安山岩				12.7	137°	+29	横長状割片。下。両側辺に使用痕。	299
29	U.F	安山岩	5.0	3.3	1.0	0.4		+28	No.28の一端部。	125
30	U.F	安山岩	2.4	2.1	0.4	2.4			横長状割片を素材。両端を折損。下辺に微小割離痕。	96

番号 (取付角)	器 種	石 材	法 足 (cm, g)			割離 角変	接合 関係	備 考	管理番 号 No.		
			長さ	幅	厚さ					重さ	
31	割	片	安山岩	2.4	3.2	0.5	3.1	+32	縦長状割片加撃時:打点から平截。背面下半に横方向からの	286	
32	割	片	安山岩				1.8	+31	ネガティブを割離面。	113	
33	割	片	安山岩	2.4	4.2	0.8	5.9	115*	打面にパンチ痕。割離面、縁部に加撃。	290	
34	割	片	安山岩	2.7	4.3	0.6	6.2	112*	下辺でステップ。打面は割離面縁部を加撃。	284	
35	割	片	安山岩	3.5	4.0	1.0	11.3	135*	打面にネガティブバルブ。	252	
36	割	片	安山岩	4.4	3.5	1.0	12.3	120*	背面に縦面とは斜位方向のポジティブな溝を、ポジティブバルブに近い。打面パンチ痕し濃れる。微小割離痕あり。	155	
37	スクレイパー		安山岩	5.3	4.0	1.2	2.4		背面中央に平坦なポジティブ面、頂面は縦溝を越えネガティブ面。一辺に調整割離。機械転用か。	285	
38	スクレイパー		安山岩	4.4	3.5	1.2	15.2		一辺で縦溝を越えネガティブ面使用。一辺に入念な調整と使用痕。他の三辺は粗い調整?ポジティブバルブは深いリタッチで除去。背面に同一方向のネガティブ面と石核底面のポジティブ面とどめる。	154	
39	スクレイパー		安山岩	4.4	2.7	1.1	12.4	102*	機械片転用のスクレイパー。端部に加工、縁とも考えられる。背面はポジティブな面打面の一部にポジティブバルブ残置。	301	
40	石	核	安山岩	3.4	3.8	1.5	24.5		機械。三辺に平坦面作出。他の一辺は交互な割離。縦面に大きなネガティブ面。平坦面一帯にパンチ痕。その一帯に濃れ痕。これに対向する一辺にも濃れ痕。割離に伴うものか。	70	
41	スクレイパー		安山岩	4.0	2.5	0.7	7.5	104*	長短比約1:1。加撃時平截。打面は平坦な割離面、パンチ痕。	139	
42	割	片	安山岩	5.0	2.0	0.5	6.2		41は側面に調整。端部に縦状割離様のリタッチあり。形器の可能性あり。	71	
43	U.F		安山岩	4.3	3.0	1.1	10.4	131*	+44	44→43で割離。長短比約1:1またはすぼまりな縦長状となる。	72
44	割	片	安山岩	3.7	3.6	0.7	8.4	119*	+43	打面調整。44は背面にポジティブな面を。43は下辺に使用痕をのこす。	58
45	チップ		安山岩	1.3	0.9	0.4	0.5	116*	+46	割離角は鈍角。ブランティングのチップか。46は背面に同様な割離痕あり。	199
46	チップ		安山岩	1.1	0.7	0.4	0.4	124*	+45		191
47	U.F		安山岩	2.8	3.5	1.1	10.9		47	自然面平坦部から縁部に打点移動。47には使用痕とどめる。	19
48	割	片	安山岩	2.0	2.7	0.9	2.4	109*	48		185
49	割	片	安山岩	2.2	3.4	1.0	5.4	100*	49		36
50	割	片	安山岩	3.4	3.8	1.0	2.4	110*	+51	50は下平欠。次いで51は割離面との縁部を加撃。一辺に微小割離痕。	159
51	U.F		安山岩	2.3	2.5	0.5	8.0	140*	+50		170
52	割	片	安山岩	1.8	1.9	0.9	3.0	95*		背面向って左→中央→右へ割離作業。下辺は直線的。打面にパンチ痕。台形様の分厚い割片。下辺に微小割離痕。	76
53	割	片	安山岩	2.5	1.7	1.3	4.4			中央で肥厚。上下端で対向方向の割離面。縦面はポジティブ。	28
54	ハンマーストーン		不明	9.1	3.9	2.0	76.4			棒状自然円礫使用。埋没欠。基部、両側面に縁打痕。表面に楕円状痕。	253
55	石	核	流紋岩				860.0			№.4と同一石材。自然面より交互に加撃。風化著しい。	435
56	台	石	花崗岩類	36.5	23.0	12.0	-			北興西区北端出土。表面面に荒れ面。	401
57	割	片	安山岩	2.3	3.0	0.7	4.5	127*		台形様スクレイパーの素材か。一辺に自然面。微小割離痕。	288

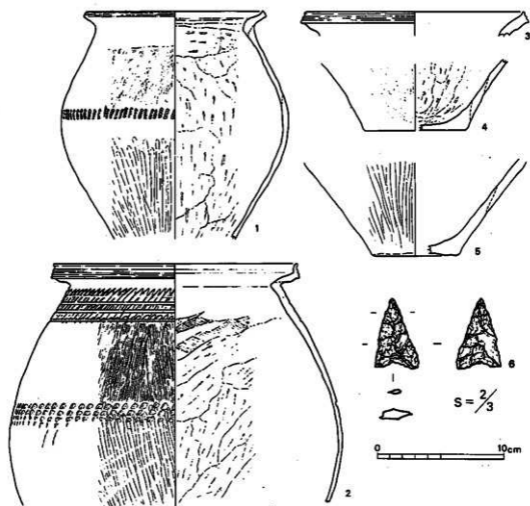
注: U.F = 使用痕のある割片。

(2) 弥生時代

周辺部のA地点からは以前より、環状石斧、弥生時代中期後半、又B地点からは同じく後期の土器類が採集されており、当該期の遺構が考えられたが、当時の生活面の想定される黒色土層の流出攪乱が著しく、土器片等の遺物はB1・A4・B6・B7区を中心に調査区全域にⅢ層中位で、散在した状況で出土した程度で、住居跡出土以外のものは、二次的に堆積したものと思われる。遺構は、B1区で住居跡1軒と溝状遺構の一部を検出。他にもAB1区・A4区・B6区で、いずれも不整形なピット状のものを数個検出したに止まった。また、B6区検出のピット1つは、柱痕



第20図 B1区住居跡実測図 (1:30)



第21図 弥生土器、石器実測図（1：3）

腐植部分に黒色土層の流入したものが検出されたものの、これに対応するピットはなく、同ピットからの出土遺物もないため、性格は断定し難い。

住居跡

B1区南側寄りの調査区東壁にかかって検出。平面形態は方形を呈し、東西及び南北の二辺を検出。既に、南辺側は流出している為、規模は不明である。遺存状況はきわめて悪く、最も残りの良い北辺でも床面からの壁高は10cm程にすぎない。床面は軟弱で硬化部分は認められない。また先の北辺にそって幅約10cm、深さ約5cmの側壁溝を検出。コーナー部分で攪乱をうけており、西辺では確認し得なかった。覆土は上部大半を失うが、まず側壁溝内に、次いで北壁から残存部の床面上に厚さ10cm前後のしまりが比較的に悪い黒色土層が、多量の木炭を含み、ほぼ全体に堆積、土器(No.2)もこの土層に覆われていた。出土遺物は、同コーナー付近床面直上から変形土器が出土したのみで、

他に周辺から変形土器(No1)・石鏃(No6)が出土したが、双方とも同遺構の流出段階で原位置を失ったものと考えられる。また、床面上出土の変形土器片に伴って、骨片2片が検出されたが小片の為、詳細は不明。

出土遺物

図化し得たものは、土器5点・石鏃1点であるが、文様の異なる土器細片を含めると、約10個体分相当が出土した。1の変形土器は、B1区住居跡付近のⅢ層下部から出土した。なで肩で胴部最大径部でゆるくカーブする倒卵形を呈するもので、底部付近を欠く。鈍く外反する口縁部は端部を横なでし、わずかに上方につまみ上げ、端面になでによる条線がめぐる。内面頸部屈曲部までのヘラ削りは、荒いタッチで肩部までを縦に、シャープな稜線をもつ頸部屈曲部までを横方向に施す。器壁は約0.5～0.3cmで、外面上半は細かい刷毛目、下半は縦方向のヘラ磨きを施し、胴最大径に櫛状工具による刺突列点文を施す。また、肩部は刷毛目調整の後、ナデを施す。淡明黄褐色を呈し、焼成保存は良好。胎土は0.2cm前後の石英粒を多く含むが、緻密で胴部下半に黒斑をもつ。

2は住居跡出土の変形土器で、胴最大径付近から下半を欠く。プロポーションは1に類似すると思われるが、胴最大径に対して頸部径が比較的大きい。口縁部の端面は上方に、外反気味に直立拡張され、3条の退化凹線が廻る。内面ヘラ削りは、胴部下半で止まり、頸部屈曲線までは刷毛目調整痕となで面を残す。押圧成形→刷毛目調整→なで・削りの順が窺われる。外面は、縦方向の単位幅3～4cm程の刷毛目(右→左へ移動)調整の後、肩部に左から右方向へ櫛状工具によって波状文風の施文がされ、その上をほぼ均等な幅で4本の浅い凹線を施す。胴部最大径よりやや上部に櫛状工具による刺突列点文を1ないし2段に廻らす。その後、この列点文下半部の上から、縦方向のヘラ磨きを施す為、2段目は部分的に残るのみで1段目下半も部分的につぶれる。3は1T(南調査区)Ⅲ層下半出土の雙口縁で、頸部は不明だが緩く外反する。口縁部端面に3条の浅く鈍い退化凹線が廻る。また、端面上端は若干つまみ上げ気味。明赤褐色を呈し、胴下半に黒斑。遺存部の大半に煤が付着する。胎土には石英・長石・雲母等を多く含むやや荒く、焼成、保存とも良好。器壁厚0.4から0.6cm。4・5の底部は遺存が良いが、外面を縦方向のヘラ磨き、内面はヘラ削り、底部屈曲部は比較的光滑で、同付近でゆるく外反し胴部下半へのびる。6の石鏃は、住居跡コーナー西壁付近のⅢ層上半より出土。長さ2.8cm、基部幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量1.2gを計る二等辺三角形等でゆるい凹基を呈す。安山岩製で、一辺に素材剥片面を止める。1と2の変形土器では内面削りの部位等異なるが、ほぼ同時と思われ、所謂塩町式^①に比定される。当地域での調査例は極めて乏しく、また山陰地方との関係から複雑な様相を成すが一応、中期終末から後期初頭にかけての所産と思われる。

註 ① 潮見浩「山陰地方I」『弥生土器集成、本編I』、昭和39年。

3. ま と め

今回の地宗寺遺跡における旧石器時代文化層の検出では、直上に厚く堆積し、降下時の一時性を明示する始良Tn火山灰の確認、第VI層下部で検出されたユニット、礫群ならびに小形ナイフ形石器を特徴とする石器群など多くの成果を得た。

第VI層下部で検出された2つのユニットは、その分布状況、内容等に大きな差を示している。部分的な調査のため即断しかねるが、全体に遺物内容、総数の貧弱さが目立つ。県内では同一水系の下本谷遺跡、下山遺跡などでも同様な傾向が示されている。いずれも河川流域の低位な丘陵上にあり、比較的短期間のうちに、居住、狩猟に適した丘陵を、獲物を求めて移動を繰り返した小規模なキャンプと考えられる。今後、冠高原遺跡群に示される母集団単位との関係が問題とされる。

中四国地域では、近畿から瀬戸内沿岸を中心として、瀬戸内技法と呼ばれる横長剣片剥離技術と、それを背影としたナイフ形石器が分布、同技法の技術的変容とナイフ形石器の形態的变化から、国府→宮田山→井島Iへの変遷が図式化されている^①。近年、同技法の再検討が進められ、成果をあげているが^②、南関東地方での類似遺物の出土層位が主に始良Tn火山灰層準より上位に認められており、その年代も、ほぼ明らかとされている^③。当遺跡出土のナイフ形石器は、その形態からは、先のナイフ形石器の変遷観からみれば終末期前後に対比されようが^④、明らかに始良Tn火山灰層準より下位^⑤にあたる。当地方での類例は乏しいが、岡山県野原遺跡群早風A地点^⑥の第I期とされた一群に共通性が認められる。そのほかでは、九州地域の鹿児島県上場遺跡^⑦第6層、熊本県石飛分校遺跡^⑧第6層、長崎県百花台遺跡^⑨第VI層、などに類似する遺物が知られる。また南関東では始良Tn層準の第VI層以下にあたる。しかし同X層から以降の各期の資料に富む南関東地域^⑩に対し、西日本とりわけ中四国地域では始良Tn以前の石器組成と、それに伴うナイフ形石器の資料に欠けており、今後同期の資料の蓄積を持って再検討したい。

註 ① 小野昭「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』89、昭和51年など。

② 鎌木義昌、高橋謙「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学』I、昭和40年。その他。

③ 同志社大学旧石器文化談話会「ふたがみ」昭和49年。松藤和人他「二上山、桜ヶ丘遺跡」昭和54年。

④ 帝塚山大学考古学研究室「シンボジウム二上山旧石器遺跡をめぐる諸問題」昭和55年。など、ただし春成氏の指摘。
『旧石器考古学』23号、昭和56年。P 89に示される様に、その出自系統、展開については、未だ不明瞭である。

⑤ 鎌木義昌「香川県井島遺跡の調査」『石器時代』4、昭和32年。

⑥ 報文では分析結果に依拠、A T直下の石器群として扱ったが、今後詳細な類例の蓄積を必要としよう。

⑦ 岡山県教育委員会「野原遺跡群早風A地点」昭和54年。

⑧ 池水寛治「鹿児島県上場遺跡」『日本考古学年報』28、昭和52年。

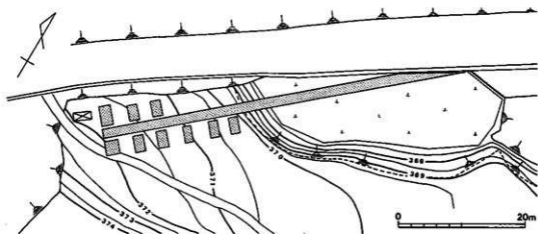
⑨ 池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』21、昭和43年。

⑩ 森生優、白石浩之「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』3、昭和51年。

⑪ 野川、鈴木、高井戸東、西之台B各遺跡の他に多数にのぼる。

Ⅲ. 河原山2号遺跡の調査

調査の概要

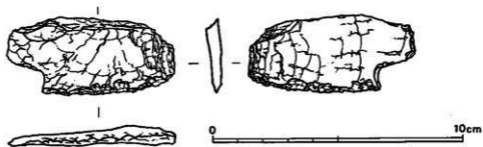


第22図 河原山2号遺跡調査区配置図(1:600)(アミ目は調査区)

本遺跡は、山県郡千代田町田福利に所在するもので昭和54年4月20日より27日まで調査を実施した。調査は、約300㎡と面積が狭いため、路線長軸方向に幅2mのトレンチを1本設定し、その左右に小グリットを9ヶ所設け、深さ約50cm掘り下げた。その結果、表土下には黒フク(10~20cm)、暗茶褐色の漸移層(約10cm)、地山層の土層状況が明らかとなった。地山層には転落石と考えられる角礫が多数あり、本来の岩盤面は検出できなかった。遺構については全く検出されず、調査区北西隅の地山層直上面においてサイドスクレイパー1点が単独で出土した。このような状況より遺構の中心は本地点よりさらに東側の丘陵斜面寄りであったと想定される。

出土遺物

粗質安山岩製のサイドスクレイパーで、刃部の一端を欠き折損部にも剝離痕あり。背面に石核素材のポジティブな面を残し、これとほぼ直角に転位して剝離され、背面一侧辺にも同一方向の剝離痕を止める。他の長側辺に交互に調整剝離を施し刃部を作り出し、一部端辺に及ぶ。重量14.4g。



第23図 河原山2号遺跡出土石器実測図(2:3)



1. 地宗寺遺跡丘陵遠景（横路遺跡より）



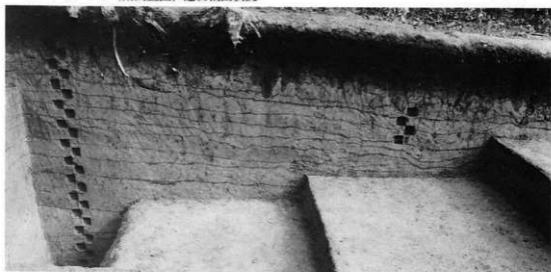
2. 地宗寺遺跡近景（南より）



3. 調査区全景 a. 北調査区 b. 1T（南調査区）



1. 1T (南調査区) 遺物検出状況



2. B3区深掘り状況



3. B1区住居跡検出状況



4. 同断面土層



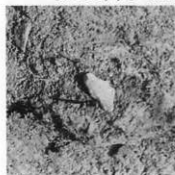
1. 1T (南調査区) 第1礫群下面検出状況



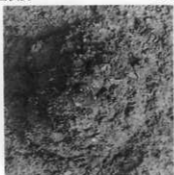
2. ユニット1 No.11出土状況



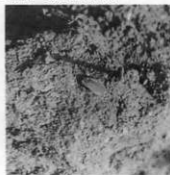
3. 第1礫群 No.54出土状況



4. ユニット1 No.10



5. ユニット1 No.9



6. ユニット1 No.8



1. 北調査区ユニット2 検出状況



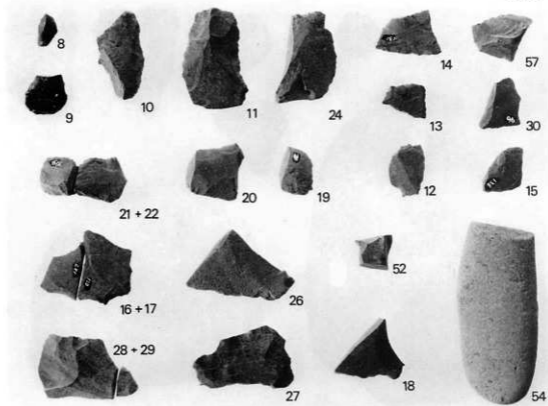
2. ユニット2 第3礫群



3. A2区 No.4, No.55出土状況



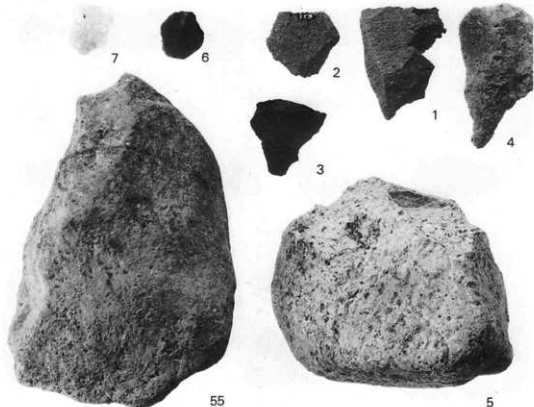
4. B3区 No.5出土状況



1. ユニット1の石器類

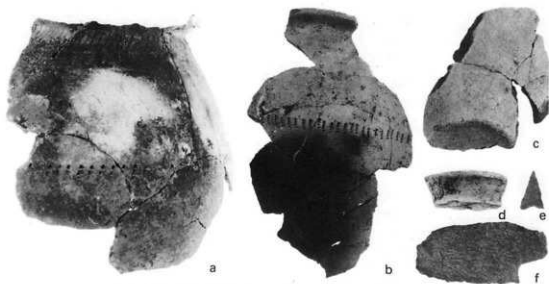


2. ユニット1の石器 (接合遺物, 石核など)



1. ユニット2の石器

(1~4剥片, 6・7ナイフ形石器, 5チョッパー, 55石核)



2. 地宗寺遺跡弥生時代遺物 (a-住居跡, c, d-B6区, b, e-B1区)
河原山2号遺跡出土遺物 (f)

昭和57年3月31日

地宗寺遺跡発掘調査報告

編集・発行

広島県教育委員会
（助）広島県埋蔵文化財調査センター

印刷

株式会社 中本本店印刷